

愛大学生コンピテンシーの改訂

ープロセスと論点ー

中井 俊樹

愛媛大学教育・学生支援機構

Revision of the Ehime University Competencies Standards for Students: Process and Issues

Toshiki NAKAI

Institute for Education and Student Support, Ehime University

1. はじめに

2012年に策定された愛大学生コンピテンシーは、愛媛大学のすべての学生が卒業時に身につけていることを期待する能力を整理したものであり、愛媛大学の教育の重要な全学的指針である。その愛大学生コンピテンシーが、2024年度から改訂されることになった。

本稿では、愛大学生コンピテンシーはどのような背景とプロセスで改訂されたのか、そして変更する際にはどのような論点があったのかを整理し、残された課題を明らかにすることを目的とする。

2. 愛大学生コンピテンシーとは

愛大学生コンピテンシーは、2012年7月の教育研究評議会において策定された。愛大学生コンピテンシーは、愛媛大学の学生が目指すべき方向目標を示したものである（松本 2013）。幅広い能力から構成される愛大学生コンピテンシーは、正課教育だけでなく、各種教育プログラムや留学などの準正課教育、ボランティア活動やサークル活動などの正課外活動も含めた大学生活全体の活動によって身につくものとして設定された。そのため、卒業時に達成が求められる到達目標とは区別して、方向目標という表現が使用された。

当時の愛大学生コンピテンシーは、5つの能力と12の具

体的な力から構成された（表1）。この愛媛大学独自の能力の枠組みを検討するにあたっては、ブルームの教育目標分類学、中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」において提案された学士力、経済産業省が提唱する社会人基礎力なども参考にされている（松本 2013）。また、2012年7月11日の教育研究評議会資料では、愛大学生コンピテンシーと各学部のディプロマ・ポリシー、共通教育で定められていた学士基礎力、準正課教育、正課外活動との関係が明記されており、既存の教育および学生支援との整合性も考慮して作成されている。

3. 外部環境の変化

2012年の時点で幅広い能力から構成される愛大学生コンピテンシーを大学全体として策定したのは、先進的な事例であった。しかし、その後は卒業時に身につける幅広い能力を策定する大学も増加し、それらを全学のディプロマ・ポリシーとして位置づける大学も見られる。

その背景には、専門分野の知識習得だけでなく、社会で活躍できる幅広い能力の獲得も大学教育に要請されるようになってきた環境変化がある。大学教育に関わる政策文書において、大学教育の成果に関する可視化や質保証が重要視されるようになるとともに、汎用的能力、非認知能力、コンピテンシー、トランスファラブルスキルといった用語が各大学の実践の場において使用されることが多くなった。

このような教育観の変化は、教育方法や教育評価にも影響を与えている。教育方法については、アクティブ・ラーニングなどの幅広い能力が獲得できる各種技法がFDなどを通して教員間に共有されるようになった。教育評価についても、幅広い能力の獲得を評価する方法として、パフォーマンス評価、実技テスト、ポートフォリオ、ルーブリックを活用した評価などが広く共有されるようになった。

4. 愛媛大学の中の位置づけの変化

制定後の愛大学生コンピテンシーは、愛媛大学の中における位置づけも変化してきた。ここではいくつかの側面に分けて愛大学生コンピテンシーの位置づけの変化を整理す

る。

(1) 愛媛大学憲章との関連性

その一つは、愛媛大学憲章と愛大学生コンピテンシーの関連性の強化である。2015年9月の教育研究評議会において愛媛大学憲章は改訂されることになった。改訂された愛媛大学憲章において、「愛媛大学は、正課教育、準正課教育、正課外活動を通して、知識や技能を適切に運用する能力、論理的に思考し判断する能力、多様な人とコミュニケーションする能力、自立した個人として生きていく能力、組織や社会の一員として生きていく能力を育成する。」という文章が追加された。愛大学生コンピテンシーの5つの能力が愛媛大学憲章において示されたのである。

表1 2012年の策定時の愛大学生コンピテンシー

I. 知識や技能を適切に運用する能力	1. 必要な情報を収集・整理できる 2. 個別の知識や技能を相互に関連づけながら習得できる 3. 習得した知識や技能を基に自分の考えを組み立て、適切に表現（記述・口述）できる
II. 論理的に思考し判断する能力	4. 広い視野と論理的思考に基づき分析・解釈できる （例：クリティカル・シンキング／創造的思考） 5. 科学的根拠に基づき判断し、解決策を提示できる （例：意思決定・判断力／課題探求・発見・解決力）
III. 多様な人とコミュニケーションする能力	6. 様々な状況に応じて適切な対話・討論ができる （例：ダイアログ／ディスカッション／プレゼンテーション） 7. 目的達成のために多様な人と協働できる （例：協調性／チームワーク／リーダーシップ）
IV. 自立した個人として生きていく能力	8. 自らの個性や適性を活かして行動できる （例：自己理解／自己決断／リフレクション） 9. 社会的関係の中で自分の行動を調整できる （例：順応性／セルフマネジメント／規範遵守）
V. 組織や社会の一員として生きていく能力	10. 他者を理解し、他者のために役立つことができる （例：「お接待」の心／ホスピタリティ） 11. 集団・組織の一員として自覚と誇りをもって行動できる （例：責任感／連帯感／帰属意識／愛校心） 12. 地域の課題を、地球規模で考え、解決に向けて貢献できる （例：社会貢献／グローバルマインド）

表2 2024年度からの愛大学生コンピテンシー

I. 知識や技能を適切に運用する能力	1. 個別の知識や技能を相互に関連づけながら習得できる 2. 習得した知識や技能を基に自分の考えを組み立て、適切に表現できる
II. 論理的に思考し判断する能力	3. 広い視野と論理的思考に基づき分析・解釈できる （例：クリティカル・シンキング／創造的思考） 4. 客観的根拠に基づき判断し、解決策を提示できる （例：意思決定・判断力／課題発見・解決力）
III. 多様な人と協働する能力	5. 様々な状況に応じて適切なコミュニケーションができる （例：傾聴／対話／ディスカッション／プレゼンテーション） 6. 目的達成のために多様な人と協働できる （例：協調性／多様性の尊重／ホスピタリティ）
IV. 自立した個人として生きていく能力	7. 自らの個性や適性を活かして行動できる （例：自己理解／自己決断／自己省察／生涯学び続ける姿勢） 8. 社会的関係の中で自分の行動を調整できる （例：規範遵守／セルフマネジメント／レジリエンス）
V. 組織や社会を牽引する能力	9. 集団・組織の一員として自覚と誇りをもって行動できる （例：責任感／連帯感／帰属意識／リーダーシップ） 10. 地域や国内外の課題に関心をもち、よりよい未来に向けて貢献できる （例：未来思考／国際性／社会貢献／アントレプレナーシップ）

(2) カリキュラムとの関連性

愛大学生コンピテンシーとカリキュラムの関連性も高められた。2016年度のカリキュラムから、教員がシラバスを登録する際に担当授業が愛大学生コンピテンシーのどの力の習得につながるのかをチェックする項目が設けられることになった。

共通教育については愛大学生コンピテンシーとの対応に加えて、共通教育の教育理念である基本姿勢、基本的コミュニケーション力、基本技能、基礎知識、基本的思考力から構成される愛媛大学が独自に定めた学士基礎力との対応が重視されていた。しかし、2025年度から導入される新しい共通教育カリキュラムにおいては、学士基礎力を廃止し、愛大学生コンピテンシーを共通教育の教育理念として位置づけることになった。

また、共通教育の必修科目である新入生セミナーや社会力入門では、授業の中で愛大学生コンピテンシーを紹介したり、学生が愛大学生コンピテンシーの習得の状況を確認したりする機会も提供されることになった。

(3) 中期目標・中期計画における活用

愛媛大学の中期目標・中期計画において愛大学生コンピテンシーが活用されるようになった。2016年度から始まる第3期の中期目標・中期計画では、大学の基本的な目標として、「愛媛大学の全学生に期待される能力「愛大学生コンピテンシー」を卒業・修了時まで習得させるため、教育環境の整備と学生支援体制の強化を図る。」という文章が加えられた。そして、愛大学生コンピテンシーの習得率を90%以上、企業の採用担当者等からの本学の卒業生に対する肯定的な評価を80%以上にするという中期計画が定められた。

2022年度から始まる第4期の中期目標・中期計画では、大学の基本的な目標として、「愛大学生コンピテンシー」

で示された汎用的能力と専門分野で身につけるべき能力を習得できる体制を強化し、志を持ち未来を切り拓くことができる自立した人材を輩出する。」という文章が加えられた。そして、卒業予定者アンケートにおいて、ディプロマ・ポリシーに基づく学習成果を習得したと回答した学生の割合を第4期中期目標期間末までに、85%以上にするという評価指標が定められた。この評価指標では、各学部などのディプロマ・ポリシーに基づく学習成果に加えて、愛大学生コンピテンシーの習得率が活用されている。

(4) 学生の習得度の把握

愛大学生コンピテンシーは大学の中期計画において位置づけられることになり、学生の習得度を把握することが進められた。2014年度の卒業予定者アンケートから愛大学生コンピテンシーの個々の力の習得度を収集することになった。また、第3期の中期目標期間において、企業の採用担当者等による愛媛大学の卒業生の愛大学生コンピテンシーの習得率も収集することになった。さらに、各学年の学生を対象とした学年末アンケートや卒業後3年経過した追跡調査アンケートにおいても、愛大学生コンピテンシーが示す力の習得度を収集することになった。

このような愛大学生コンピテンシーの習得度を把握することで、経年変化を確認することや、愛大学生コンピテンシーの習得度の高い学生にはどのような特徴があるのかといった分析が可能になった。

(5) 習得度の学外への公表

愛大学生コンピテンシーの習得率が大学の中期計画における評価指標となったため、「平成28事業年度に係る業務の実績に関する報告書」から愛大学生コンピテンシーの習得率が学外に公表されるようになった。

また、2021年9月8日の教育研究評議会において、「愛

表3 卒業時の愛大学生コンピテンシーの習得状況

	習得率
必要な情報を収集・整理できる	97.5%
個別の知識や技能を相互に関連づけながら習得できる	95.6%
習得した知識や技能を基に自分の考えを組み立て、適切に表現（記述・口述）できる	95.4%
広い視野と論理的思考に基づき分析・解釈できる	95.6%
科学的根拠に基づき判断し、解決策を提示できる	95.9%
様々な状況に応じて適切な対話・討論ができる	93.5%
目的達成のために多様な人と協働できる	93.9%
自らの個性や適性を活かして行動できる	92.0%
社会的関係の中で自分の行動を調整できる	95.0%
他者を理解し、他者のために役立つことができる	94.9%
集団・組織の一員として自覚と誇りをもって行動できる	92.9%
地域や国内外の課題を自ら考察し、解決に向けて行動できる	78.1%

注) 習得率は、2023年の卒業予定者アンケートにおいて個々の力に対して習得したと回答した学生の比率
出所 愛媛大学教育・学生支援機構 (2024)「令和5年度 愛媛大学卒業予定者アンケート調査報告書」

媛大学の教育の内部質保証に係る基本方針」に基づき、教育・学生支援機構で実施している新入生アンケート、前学期末アンケート、後学期末アンケート、卒業予定者アンケート及び大学院修了予定者アンケートの集計結果を公表することになった。そして、2021年度の卒業予定者アンケートの結果から、愛大学生コンピテンシーの習得率が教育企画室ウェブサイトで公開することになった。

(6) 大学院生の汎用的能力との整理

2022年には、大学院生が修了後に社会で活躍するための幅広い汎用的な能力として、リーダーシップ、コミュニケーション、問題解決、キャリア形成、倫理の5つの能力から構成される愛大トランスファブルスキルが制定された。

大学院教育においても幅広い能力の獲得の重要性を示すとともに、愛大学生コンピテンシーの大学院版として愛大トランスファブルスキルが整理されることになった。

5. 2018年度の愛大学生コンピテンシーの改訂

愛大学生コンピテンシーは、2018年に改訂を行っている。この時の改訂は、主に2点である。第一に、力5の文言の修正である。「科学的根拠に基づき判断し、解決策を提示できる」が「客観的根拠に基づき判断し、解決策を提示できる」に変更された。学生のアンケートを通して、「科学的根拠」という表現が文系の学生にとっては身近に感じられないことが明らかになったため、意図が伝わるように変更された。

第二に、コンピテンシーの力12の文言の修正である。「地域の課題を、地球規模で考え、解決に向けて貢献できる」が「地域や国内外の課題を多様な観点から考察し、解決に向けて主体的に参画できる」に変更された。学生のアンケートを通して、「地域の課題を、地球規模で考え、解決に向けて貢献できる」という表現の示す内容が理解しにくいことが明らかになったためである。また、具体的な活動がわかるように例示として、国内外でのボランティア活動・フィールドワーク、留学が追加された。

2018年の改訂は、愛大学生コンピテンシーを学生により伝わりやすい表現に変更したものであり、大きな見直しではなく文章表現の修正の範囲であったと言える。

6. 今回の愛大学生コンピテンシーの改訂

今回の愛大学生コンピテンシーの改訂は、教育・学生支援機構内での議論、教育・学生支援機構と各学部との意見交換、部局長協議会、教育学生支援会議などの各種会議などで議論され、2023年7月の教育研究評議会において改訂が承認され、2024年4月から適用されることになった。

2024年度からの愛大学生コンピテンシーは表2および資料1の通りである。

大きな変更点は以下の通りである。まずは、これまでの5つの能力と12の力が、5つの能力と10の力に整理された。能力については、「多様な人とコミュニケーションする能力」が「多様な人と協働する能力」に、「組織や社会の一員として生きていく能力」が「組織や社会を牽引する能力」に変更された。力については、「様々な状況に応じて適切な対話・討論ができる」が「様々な状況に応じて適切なコミュニケーションができる」に、「地域や国内外の課題を自ら考察し、解決に向けて行動できる」が「地域や国内外の課題に関心を持ち、よりよい未来に向けて貢献できる」に変更された。一方、「必要な情報を収集・整理できる」と「他者を理解し、他者のために役立つことができる」は、12の力を10の力に整理される過程で削除となった。また、例示として、多様性の尊重、自己省察、生涯学び続ける姿勢、レジリエンス、未来思考、国際性、アントレプレナーシップといった新しい用語が加えられた。

7. 愛大学生コンピテンシーの改訂における論点

愛大学生コンピテンシーの改訂はさまざまな会議などで議論が重ねられた。議論になった主な論点を以下に整理したい。

(1) 社会の変化への対応

今回の愛大学生コンピテンシーの改訂にあたって、2012年に制定された愛大学生コンピテンシーが社会の変化に十分に対応できていないのではないかと議論があった。急速な少子高齢化、デジタル技術の進展、グローバル化の進展などに加えて、大学教育に大きな影響を与えたコロナ禍も経験することになった。このように社会が急激に変化し予測不可能な時代において、力強く生きていく卒業生像が求められていたと言える。

それを象徴するものは、能力の一つである「組織や社会の一員として生きていく能力」を「組織や社会を牽引する能力」に変更した点にある。牽引というこれまでに使用されていない力強い言葉が学生に期待する能力に加えられた。

この変更については、会議などで否定的な意見も寄せられた。卒業生全員に牽引する能力を身につけさせる必要があるのかという意見や、社会は牽引する能力を持つ人だけでは成り立たずサポートする人も必要であるという意見もあった。

一方、組織や社会に対して積極的な姿勢をもつ表現を加えることが重要であるという意見、牽引という文言は自律的な行動という意味においてよいという意見、牽引という

言葉については特に嫌悪感は学部内で見られなかったという意見なども寄せられた。策定の過程ではこのような賛成意見と反対意見が見られたが、最終的には「組織や社会を牽引する能力」で了承された。

(2) 愛媛大学憲章との整合性

愛大学生コンピテンシーと愛媛大学憲章の整合性も議論となった。愛媛大学憲章は、「知識や技能を適切に運用する能力、論理的に思考し判断する能力、多様な人とコミュニケーションする能力、自立した個人として生きていく能力、組織や社会の一員として生きていく能力を育成する」という文章で策定時の愛大学生コンピテンシーの5つの能力を示していた。そのため、愛大学生コンピテンシーの5つの能力を改訂することについては否定的な意見もあった。愛媛大学憲章は大学の教育に関する理念や目標、目指すべき方向性などを定めたものであり愛大学生コンピテンシーはそれにそって構成されるべきだという意見、愛媛大学憲章を近々見直す予定がないのであれば愛大学生コンピテンシーを見直すべきではないという意見などがあった。

このような反対意見が見られたが、社会の変化への対応を進めるためには5つの能力の見直しが重要であるという意見、愛媛大学憲章に示された育成する能力を踏まえてより高い水準の能力を設定しているので一定の整合性はとれているので改訂する方がよいという意見が見られた。結果として、愛大学生コンピテンシーの5つの能力を改訂することが了承された。

(3) カリキュラムとの整合性

カリキュラムとの整合性も議論となった。愛大学生コンピテンシーの改訂の検討と同時期に共通教育に未来思考支援科目群を導入する検討も行ってきた。そのため、カリキュラムに導入する未来思考支援科目群を念頭に入れて新しい愛大学生コンピテンシーを定めることができた側面がある。「地域や国内外の課題に関心をもち、よりよい未来に向けて貢献できる」という力は、未来思考支援科目群と対応させたものである。また、共通教育カリキュラムにおいて学士基礎力が廃止され、愛大学生コンピテンシーが重要な教育理念として位置づけられることになった。

一方で、新しく愛大学生コンピテンシーで定めた5つの能力と10の力に対応する授業科目が設定されていないのではないかという意見、例に示された用語の能力を身につける授業は設定されているのかという意見があった。さらに、今回の愛大学生コンピテンシーの見直しにより、3つのポリシーを見直す必要があるのではないかといった意見もあった。

8. 今回の改訂の意義と残された課題

愛媛大学内でのさまざまな意見を集約することで、2024年度から適用される愛大学生コンピテンシーが策定されることになった。全学的に検討して社会の変化に対応した愛大学生コンピテンシーに改訂することができた点は一定の評価ができるであろう。

一方で、改訂の過程ではさまざまな意見が出されており、いくつかの課題も残されていると言える。ここでは、残された課題を2点指摘しておきたい。

第一に、愛媛大学憲章との整合性をどのように考えるかである。社会の変化が激しい中では、卒業生に身につけるべき能力は今後も変化していくであろう。今回の愛大学生コンピテンシーの改訂において、愛媛大学憲章との整合性の課題について多くの教職員から意見があった。愛媛大学は愛媛大学憲章で学生が身につける具体的な能力を示しているという特徴をもっている。愛媛大学憲章という大学の理念を記す文章に具体的な能力を示したことで、大学の内外に愛媛大学の教育の方向性を浸透させた効果は大きかったと言えるだろう。

一方、大学の理念を記す文章に具体的な能力が記されていることによって、愛大学生コンピテンシーの改訂案を検討する上で制約条件になった点も否定できない。他大学では、大学憲章のような大学の理念を記す文章において、より抽象的に教育の方向性を示し社会の変化に柔軟に対応することができる表現になっている場合が多い。大学における憲章は簡単に変更するべきものではないが、今後の社会の変化に柔軟に対応していくためには、愛媛大学憲章の表現の方法を修正することも検討できるであろう。

第二に、愛大学生コンピテンシーは教育における方向目標のままではよいのかという課題である。2012年の策定時の教育研究評議会資料では、愛大学生コンピテンシーはその習得度を測定することはできるが、評価の対象外と位置づけられていた。また、愛大学生コンピテンシーは、正課教育だけでなく、準正課教育、正課外活動も含めた大学生活全体の活動によって身につくという考え方をとっており、学生に参加を義務づけられない準正課教育や正課外活動の効果を大学として保証することは難しいという意見もある。

一方、愛大学生コンピテンシーは正課教育であるカリキュラムとの整合性も高まり、学生がどの程度身につけているのかの評価結果も蓄積してきた。また、すでに中期計画では愛大学生コンピテンシーの習得度を大学の評価指標としてきた。専門分野の知識以外の幅広い能力に対する社会の期待も高まるとともに、その質保証と情報公開もより求められるであろう。このような現状を踏まえると、方向目標から到達目標への変更や習得度を評価するルーブリックの作成なども今後検討できるであろう。

参考文献

- 愛媛大学教育・学生支援機構 (2024) 「令和5年度 愛媛大学卒業予定者アンケート調査報告書」
- 中井俊樹編 (2022) 『シリーズ大学教育の質保証1 カリキュラムの編成』, 玉川大学出版部
- 野本ひさ, 平尾智隆, 花田真吾, 岡靖子, 埜康介 (2015) 「どのような体験が愛大学生コンピテンシーを獲得させるのか? —キャリア・ポートフォリオのテキストマイニング分析」『大学教育実践ジャーナル』 第13号, pp. 1-7
- 松本長彦 (2013) 「「愛媛大学学生として期待される能力—愛大学生コンピテンシー」を解説する (試論)」『大学教育実践ジャーナル』 第11号, pp. 1-10
- 村田晋也, 小林直人 (2015) 「正課教育, 準正課教育, 正課外活動 —「愛大学生コンピテンシー」の育成のために」『大学時報』 第64巻, pp. 42-47

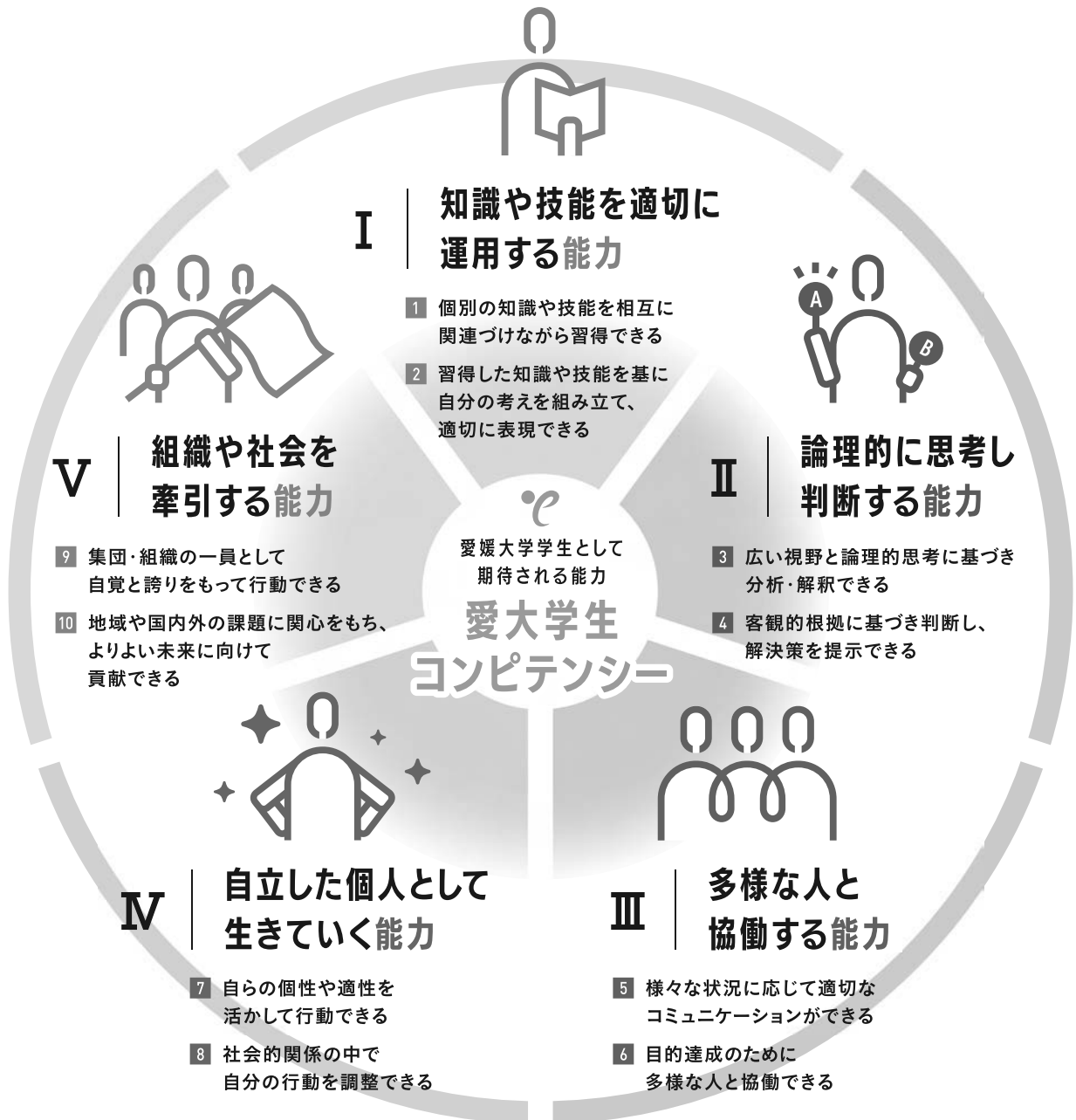
資料1 2024年度の愛大学生コンピテンシーのパンフレット

愛媛大学学生として期待される能力 愛大学生コンピテンシー

愛大学生コンピテンシー(2012年7月策定)は、愛媛大学憲章にもとづき、
すべての学部の学生が卒業時に身につけていることが期待される能力を示すもので、
愛媛大学全体の教育目標と位置づけることができます。

学生のみなさんは、正課教育、準正課教育、正課外活動を通じてこれらの能力を身につけることができます。

専門分野の知識に加えて、愛大学生コンピテンシーで示された幅広い能力を習得することで、
みなさんが今後の未来を切り拓いていくことを願っています。





愛媛大学学生として期待される能力 / 愛大学生コンピテンシー

I 知識や技能を適切に運用する能力



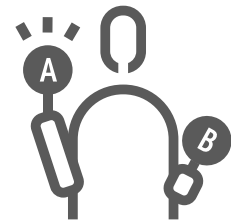
1 個別の知識や技能を相互に関連づけながら習得できる

授業などを通じて得た知識や技能を相互に関連づけて、状況に応じて使いこなせるようにすることが求められます。実験や実習、調査や観察、文献講読などを単に断片的に行うだけでは、本当の意味で知識や技能を獲得したことはありません。学んだことを自分の中で相互に関連づけ、可能な限り体系化することによって初めて、それらを習得したと言えます。

2 習得した知識や技能を基に自分の考えを組み立て、適切に表現できる

習得した知識や技能が本当の意味で自分のものとなったと言えるのは、それを自分の中できちんと体系化し、適切に表現できるようになった時です。わかっているけれども表現できないのでは、本当の意味でわかったとは言えません。自分が得た知識を基に、論理的な筋道を立てて、相手が理解しやすい適切な方法で表現する力が求められます。この力を身につけることができ、自分の学習の成果が統合されたと言えます。

II 論理的に思考し判断する能力



3 広い視野と論理的思考に基づき分析・解釈できる

例：クリティカル・シンキング／創造的思考

様々な情報を収集・整理し、それを相互に関連づけ、広い視野から論理的に考えて、対象を分析・解釈します。この力は知識や技能の運用と一体化して働くものです。例えばクリティカル・シンキングとは、既存の学問的知識の体系や枠組みも考慮しながら、客観的根拠に基づいて対象を多面的に考察し、論理的に思考することです。こうした力を身につけることによって、他者を納得させることができるようになります。

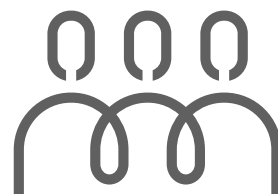
4 客観的根拠に基づき判断し、解決策を提示できる

例：意思決定・判断力／課題発見・解決力

学問研究においてはもちろんのこと、社会生活においても、私たちは常に意思決定を求められ、判断力を発揮しなければなりません。そして、自立した個人として生きるためには、意思決定の根拠をきちんと認識し、客観的に正当なものであることを示すことが求められます。そのためには、自分の置かれている状況を正しく認識し、そこにある課題を見つけ出し、その課題を解決する方策を考え出す必要があります。

Ⅲ

多様な人と 協働する能力



5

様々な状況に応じて適切な
コミュニケーションができる

例：傾聴／対話／ディスカッション／プレゼンテーション

現代社会において、様々な背景を持った人々が、チームを組んで課題に取り組むということは日常化・一般化してきています。そうした状況に柔軟に対応するためにも、正確な日本語運用能力や外国語運用能力、ビジネス・マナーといった狭義のコミュニケーション・スキルの獲得のみならず、相手の意図を適切に汲み取りながら自分の考えも効果的に伝えていく力が求められています。

6

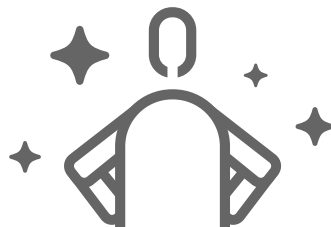
目的達成のために
多様な人と協働できる

例：協調性／多様性の尊重／ホスピタリティ

大きな目的を達成するためには、多くの人と互いに協力し合って、協調していく必要があります。実際に多様なメンバーでチームを編成し様々な活動を行うなかで、それぞれがもつ個人の多様性に気づき、それを受容し、理解するという経験を数多く重ねることが必要です。協働のためには、他者の幸せのために行動できる「お接待」の心と実践力を身につけることが求められます。

Ⅳ

自立した個人として 生きていく能力



7

自らの個性や適性を
活かして行動できる

例：自己理解／自己決断／自己省察／生涯学び続ける姿勢

個々人が自己を実現するためには、社会的状況の中で、自分自身の個性や適性を十分に理解し、それを踏まえて決断することが大切です。そのために重要な営みが振り返りです。自身の経験や学んだことを振り返ることで、深い自己理解が促され、そこを核としながら主体的に行動していくことが可能になります。また、振り返りは継続的にを行い、生涯にわたって学び続ける姿勢を身につけることが期待されます。

8

社会的関係の中で
自分の行動を調整できる

例：規範遵守／セルフマネジメント／レジリエンス

人は社会的存在であり、社会（他者）との関係の中で自分の能力を最大限に発揮していかなければなりません。社会には様々なルールや制約があり、自分が所属する組織や集団においても同様です。限られた資源や制約の中で、所属組織のルールを遵守・順応し、自分の行動を調整していくことが求められます。また、困難な状況に適切に対処できる力も予測困難な社会においてより重要となっていきます。

Ⅴ

組織や社会を 牽引する能力



9

集団・組織の一員として
自覚と誇りをもって行動できる

例：責任感／連帯感／帰属意識／リーダーシップ

集団や組織は、構成員それぞれが責任と自覚を持って行動し、役割を果たすことによって初めて機能します。根拠に基づき状況を把握し、他者との対話や協働を行いながら、課題を見極め、解決策を考え、行動に移していきます。そのことによって、所属している集団や組織をよりよいものにしていくことができます。その結果として、自分が所属している社会や組織、そこに所属している自分自身に対して誇りを持てるようになります。

10

地域や国内外の課題に関心をもち、
よりよい未来に向けて貢献できる

例：未来思考／国際性／社会貢献／アントレプレナーシップ

地域や国内外には様々な課題があります。まず大切なのは、そのような課題に目をそらさず向き合う姿勢です。そして、よりよい未来に向けて、広い視野のもと、社会や環境について考え、自分なりにできる最善を尽くすことが期待されます。未来の社会をつくっていく担い手の一人としての思考や行動が求められています。